30T-pm10

薬剤師の職能変化の社会科学的考察

○赤木　佳寿子[1]([1]一橋大院社会)

【目的】近年の薬剤師の職能変化の要因や本質について社会科学的な分析をおこない、社会から求められている薬剤師の役割の解明を目的とする。

近年の薬剤師の大幅な職能の変化は『「町の化学者」から「医療の担い手」への変化』と表現されるように、医療へのかかわりを増す変化である。また、ジェネリック薬の普及は医療用の分野において医薬品の選択という職権拡大をもたらした。病院薬剤師は病棟に進出し、臨床業務を行うようになった。さらに、処方提案や処方設計、最近では CDTM という取組みも行われ、医師以外の者には不可侵であった処方箋にまで関与するようになった。これらは薬剤師が職能を広げる方向に変化していっているように見受けられる。はたして本当に職能の拡大なのか。また、他の医療職との関係においてなぜ、そのような変化が可能であったのだろうか。医薬分業の進展との関連はどうなのであろうか。これらの問いに答え、薬剤師の職能変化の本質を分析することは社会に求められている薬剤師の役割とは何かについての解明の一助となる。幅広い事象が対象であるため、本発表では研究の概要とその意義、これからの展望について述べる。

【方法】1970 年代以降の薬剤師の職能変化を雑誌や書籍、統計資料を用い、社会科学的な分析を行う。

【結果】職能変化を示す事象のひとつ、薬剤師教育の 6 年制への年限延長の検討において「医療薬学」という教育目標が改革の根拠となったことが確認された。また、医薬分業の進展を医療薬学で捉える可能性が見出され、日本における「医療薬学」という概念が薬剤師の職能変化に関っていることが示唆された。